禅林聯句の当座性

――「湯山聯句」第二庚韻の検討

朝倉尚

筆者は、禅僧の興行した聯句を特に「禅林聯句」と呼称し、その大きな特徴が「当座性」であるらしいことを指摘した。室町時代後期の禅林聯句の代表とも目されている『湯山聯句』については、「寿春妙永小論――禅林文壇における文筆活動――」（国語と国文・第五十一巻第九号）・「景徐周麟と『湯山聯句』――成立の背景について――」（国語と国文学・昭昭五十八年三月号）によって聯句の成立した背景を把握することに努めた上で、「禅林聯句の当座性――『湯山聯句』第一冒頭八聯の検討――」（国語国文・第五十二巻第七号）において第一寒韻の冒頭八聯について検討した。本稿では、少しく視野を拡げ、第二庚韻の巻を対象とし、当座性について考察を加えたい。すでに島津忠夫氏が「湯山聯句とその抄」（国語国文・第四十一巻第四号）において、「（前略）第二以下の巻では、調子が軽くなり、従って嘱目の事象による句作りが多く見られる現象を呈してゐるといへよう。」とされ、「（前略）第二庚韻以下の巻には、第二の性格、即ち当座性が顕著にあらはれてゐるといへよう。」とされる。第二庚韻の巻が、当座性の濃厚な巻であることを指摘される。

(I) 第二庚韻の巻の本文

筆者は、第二庚韻については、極端な言い方ではあるが、「全句に当座性が発揮されているのではないか」と考える。そこで、第二庚韻の本文を紹介する。本文は、湯山聯句抄より註解文を除いて作成した。京都大学蔵「湯山聯句鈔」を底本とし、霊雲院本と板本によって補正した。句の番号と返り点は私に施した。

庚韻

1 始入二温泉寺一　2 一湯自二名
3 也勝二驪岫水一　4 十載我三行
5 熟面山環レ屋　6 壮図郡築レ城
7 捲レ簾雲走レ馬　8 煮レ薬昼流レ鶯
9 詩渋轆轤韻　10 價廉榾柮声
11 魚籃誰氏女　12 鬻店某師兄
13 夏夢二士峰雪一　14 朝占二日本晴一
15 基蒙二菩薩号一　16 恵被二琰羅迎一
17 嵐湿講経案　18 風揺勧善旗
19 癩児牽二幾伴一　20 旅客話二多情一
21 有レ谷鎌倉近　22 其流鼓瀑鳴
23 進レ瓜為二故事一　24 打レ麥巳秋成
25 盗臥村無レ犬　26 梵稀楼不レ鯨
27 東方光瑞現　28 南律戒珠明
29 人把二浴裙一曝　30 前村陽半傾

31 僧支二吟杖一立　32 後閣月初生
33 欲レ洗二維摩疾一　34 可レ消二波離醒一
35 共レ房皆楚越　36 異レ席或劉嬴
37 玳瑁箏皮脱　38 瑠璃木舌軽
39 赤松分レ国接　40 青葉倚レ門撑
41 心外予何仏　42 胸中欲是兵
43 隔レ晨橋痎市　44 筆レ日路游程
45 驢痩暮過レ嶺　46 鶏鳴早出レ京
47 名遭二関吏問一　48 渡与二野人一争
49 鞋破奈二嚢渋一　50 蓋張要二僕更一
51 挿レ秧時小雨　52 炊レ黍暁長庚
53 病脚陶耶我　54 飢腸甫也征
55 苦哉茶似レ蜀　56 薄者酒云レ営
57 徒袖二楊枝手一　58 莫レ尤二木槵晴一
59 説レ詩逢二項善一　60 好レ学見二蘇甥一
61 壁影焼二麻骨一　62 厨珍啜二菜羹一
63 餘生唯睡課　64 毎旦甚公評
65 意気名二瞞虎一　66 文章姓二禰鸚一
67 難波蘆矢直　68 児屋蒻籠盛
69 筧憶二和菴主一　70 香尋二遠社盟一
71 大都縮混レ素　72 却掃紫兼レ赭
73 尺八唐音碎　74 五千竺典盈
75 龍王斎曾鼓　76 鵠叟隠居枰
77 苔暗光明蔵　78 塵埋解脱坑
79 身衰添二薬裹一　80 眼翳減二灯檠一
81 咲々白拈賊　82 還如二摸象盲一
83 休々黄達磨　84 自称二老狐精一
85 偏局毒攻レ毒　86 多言猩罵レ猩
87 桄榔溪彷彿　88 翡翠岳崢嶸
89 薪使二西施賈一　90 樹従二北秀一栄
91 気蒸塩井湧　92 土燥墨池平
93 鵝変二換羊帖一　94 雒知二司馬英一
95 政纔凉五月　96 暦尚夏新正
97 下レ々閻浮報　98 重レ々地獄衡
99 業風吹老々　100 聚首雪莖々

京都大学本では、32句と33句の二句を欠き、96句の「新」字を空白とする（その他の異同については今は触れない。）。

一句として解する時、湯山に関する句が多いことに気付く。しかも、宿舎を中心にしながら、周辺の名勝にまで視野が拡げられている。湯山入りした直後の五月五日より始められた聯句であるが、第二庚韻の巻ともなると、宿舎にも温泉にも周囲の光景にも慣れたことが句に反映したものと思われる。さらに、第二庚韻が製せられた当日、温泉寺とその周辺を散策したのではないかと想像する。散策の途次にも作句されていたものかもしれない。

ここで改めて、聯句と当座性について考える。聯句を製するに際して、禅僧も、いわゆる連歌で言う「付合」に留意したことであろう。前句を吟味した上で、付句が製せられる。この付合を重ねることによって一巻は展開するわけであるが、その展開の仕方を連歌では「行様」と称した。連歌の行様には、厳密な規制が存した。連歌式目が発生し、整備されている。連歌作者は、行様を念頭にしなが

ら、前句との付合を考えて作句することになる。禅林聯句では、少なくとも「湯山聯句」の時代において、式目らしきは存在したようであるが、行様、一巻の展開の仕方に対する規制は厳格でない。連歌とは比較にならないほど、規制がゆるやかである。

それでは、禅林聯句では、前句との付合のみを考えればよかったのであろうか。押韻や対句のことを考慮するにしても、前句に関連する句を付けるだけであれば、禅僧にとってさほど面白味が存しなかったと思われる。そこで筆者は、禅林聯句では、一篇の長篇詩として完成されるわけであるが、付合を重ねた表面の意味とともに、一句としてその背後に蔵された意味が大いに重要視されていたと考える。句の背後に蔵される意味とは、その句が製せられた背景を示すものである。当座性や、観念的世界の展開による博引旁証等を内容とする。そして、むしろこれらが一句、一巻を規制する役割を果たしていたのではあるまいか。当座性は、禅林聯句の一巻を規制する最大の要素であった。

(II) 冒頭八聯の検討

冒頭の八聯は、一巻の中で連衆が最も注意を払った箇所であろう。八聯十六句を、特に当座性に注目し、素材面より整理してみたい。なお、本項のみならずこの稿をなすにあたり、主として参照した諸記録を掲げておく。

作品名	作者	参照内容・備考	所在
(イ)温泉行記	瑞溪周鳳	宝徳四年(一四五二)四月七日～四月二七日湯山行記録	五山文学新集所収
(ロ)日録	季瓊真蘂	文正元年(一四六六)二月二九日～閏二月二三日湯山行記録	蔭涼軒日録所収
(ハ)有馬道の記	蓮如兼寿	文明一五年(一四八三)八月二九日～九月一七日湯山行記録	蓮如上人遺文所収
(ニ)湯山聯句鈔	一韓智翊	註解。永正元年(一五〇四)八月抄	京都大学国語国文資料叢書所収
(ホ)有馬山温泉小鑑	不明	案内記。貞享二年(一六八五)六月梓行。	日本名所風俗図会所収

特に(イ)と(ロ)は、道中、湯山における記述が詳細であり、「湯山聯句」が成立した明応九年(一五〇〇)当時の実態を解明する上で有益である。各書よりの引用に際しては略号を用いた(略号一覧参照)。

1　始入温泉寺　　2　一湯自二名

唱句1は、湯山の主と目された温泉寺に対する挨拶の句である。初めての湯山行であることを表明する。自己のことを詠出した句として解される(述後)。人事の句である。季節を詠み込んでいないが、当座性は濃厚である。入韻句2は、湯山の湯が同じ湯でありながら二の名を持つことを詠出する。湯山の実状を作句したものである。湯山には「一の湯」と「二の湯」が存した。

1・2句は、第一寒韻の場合と同じく、対句でない。同一作者と考えられ、おそらくは寿春である。なお、2句の韻字「名」は庚韻である。一巻は庚韻で統一されており、以下の押韻、韻字については指摘しない。

3　也勝驪岫水　　4　十載我三行

3句では前句の湯が驪山華清池の温泉の湯よりも勝っているとする。湯山の湯を称揚したものである。驪山の温泉を連想することは容易であったらしく、季瓊も「所司代興次郎共入浴、私語云、想昔年三郎温泉宮裏、如與貴妃浴者、尤此方此趣、爲恰好乎」（日録、文正元・閏2・20条）として称揚する。4句では驪山の湯にも比されるこの温泉に、十年間に三度出かけたと付ける。作者が自己の湯山行を詠出しているのではあるまいか。

3・4句は、1・2句と対句をなし、同一作者と考えられる。景徐は、明応二年、四年、九年に湯山に出かけている（前掲「景徐周麟と「湯山聯句」成立の背景について」論文参照）。4句の内容と一致する。そこで、3・4句は景徐の作と考えるのが妥当である。1・2句は寿春の作ということになる。

5　熟面山環屋　　6　壮図郡築城

5句では、「三行」により屋をめぐる山々がすっかり顔見知りであるとする。湯山は、六甲山北側の中腹にあり、東、西、南の三方を愛宕山、落葉山、鉄砲山等に囲まれる。一句としては、座景を素材とした句であろう。季瓊も「屋後青山黑（呈）舊面」（日録、文正元・2・時条）とする。6句では、その山に大計を企てた郡（主）が城を築いていると付ける。例えば、西の落葉山山頂には南北朝時代に創築された有馬城が存した。一句としては座景を素材とする。

7　捲簾雲走馬　　8　煮薬昼流鶯

7句では、簾を捲きあげて古城（址）の彼方の雲を望んでいる。雲の馬は軍馬である。一句としては、嘱目の景を素材としたものと解する。8句は、薬を煎じながら流鶯を聞く昼下りの景として付けている。前句の「捲簾」より杜甫の「水閣朝霽奉簡雲安嚴明府」詩〝鈎簾宿鷺起、丸薬流鶯囀〟句を想起しての付合であろう。作者の観念的世界が展開されている。が、一方では特に病身である景徐が服薬していたのも事実であろう。一句としては、人事・座景を素材にした句でもある。

9　詩渋轆轤韻　　10　價廉榾柮声

9句は、薬を煎じながら、難渋して詩を製している様として付けたものであろう。「轆轤韻」については、一韓は「轆（轤）ノ韻ト云ハ詩ノ長篇ノ物ニ韻ヲフムニ（下略）」（抄）と、古体詩の押韻法の一として解している。が、「轆轤韻」を詠出した契機は、やはり湯山の風物でもある轆轤（鉋）であろう。轆轤鉋で挽いた挽物細工は、湯山の名産であった。瑞溪はその実見聞を「浴後就屋下見店主製器、手把口刃、以觸（フル）器材、側有一人牽轆轤、故謂之牽（ヒキ）物乎」（行記、宝徳4・4・9条）と記している。季瓊は、その喧噪を「四面轆轤聲喧也」（日録、文正元・閏2・7条）とする。景徐の明応二年の湯山行では、「今見輪扁斲輪」題で〝輪扁斲輪如此無、家々穿木作盃盂、閑從堂上觀堂下、度刃奔流牽轆轤〟詩を製している（詩題の典拠は荘子・天道第十三に存する）。当年・明応九年の湯山行でも、「次楞庵韵（干時萬温泉）」詩に〝此地温泉涌却初、浴房夢聽轆轤車〟とする。10句は、前句の轆轤の響きに難渋するのに対して、薪の大安売りの声を詠出する。湯山において物売りの声が頻りであったことは、季瓊の「戸外商賣往復如織、其賣聲種々在耳」（日録、文正元・閏2・9条）によって想像される。景徐は、明応二年の湯山行で、「樵村一束薪」詩に〝憶會買炭囊中渋、一束三錢溪上村〟とする。

11　魚籃誰氏女　　12　鬻店某師兄

11句は、薪売りに対して魚を売る女を付けている。一句の背景をなしたのは、季瓊も「依御所坊愚老寄宿、自藥師堂禁賣魚者、（中略）而使之賣之、卽四面有賣魚聲」（日録、文正元・閏2・3条）、「賣魚聲喧

也」（『録』文正元・閏2・4条）とするように、魚売りの声であろう。この魚売りの中で特に女性の魚売りを、三十三観音の一である魚籃観音に比さんとしたのが一句の眼目である。湯山の風物を素材とする。魚籃観音は、手に魚籃（魚かご）を持つ美女形の観音で、馬氏の妻となり馬郎婦観音とも呼ばれる。12句は、前句の魚籃観音の逸話に対して、雪峰と岩頭の鰲山店旅宿における逸話を配している。あの魚売りの女性がおそらく魚籃観音の化身であるのに対し、ここに安息されるあなたこそあの鰲山店における某師兄・岩頭であるとする。相手を岩頭に比したもので、座衆の人事を素材とする。なお、兄弟の親密を示す逸話として理解されていた「雪峰鰲山成道」逸話は、やがて「湯山聯句」の景徐の跋文にも詠出されることになる。跋文では、寿春を岩頭に比し、景徐を岩頭の助言によって成道した雪峰に比していると考えた（前掲「景徐周麟と『湯山聯句』―成立の背景について―」論文参照）。

13　夏夢士峰雪　　14　朝占日本晴

13句は、前句の雪に降り籠められて毎日ただ「打睡」（ねむること）していた岩頭より「夢」を連想したのであろう。あなたに接していると夏に士峯の雪を夢みたように清涼であると付ける。ただし、一句は座景を背景にしたものであろう。今の時は五月であり、湯山からは旧三輪村尼寺の富士山（有馬富士）が望まれる。「士峰雪」は、雪峰その人をも想起させる。14句は、おめでたい富士の夢に対し、日本晴れで応じている。当日の天候でもあろう。

15　基蒙菩薩号　　16　恵被琰羅迎

15句は、行基が「菩薩」の称号を与えられたことを述べる。一韓は「日本ノ行基ハ菩薩ト云ソ」（抄）とし、前句14の「日本」の寄合であるとする。行基は、摂津国武庫郡の昆陽（寺）より入り、温泉寺を開基したとされる。16句は、前句における行基の称揚に対し、尊恵が閻魔王宮より迎えられた逸話を付ける。慈心坊尊恵は、清澄寺より温泉寺に住持した。温泉寺と行基、尊恵は因縁が深い。特に、温泉寺には寺記・縁起が存し、「従此往温泉寺、聞律院僧讀本寺記、九湯客出百錢、則院僧出讀之、（中略）記三巻、皆係以繪支」（行記、宝徳4・4・22条）のように、料金を支払うと僧が読みあげて絵解きをした。この縁起の中心をなすのが、行基が湯山温泉を開いた経緯と尊恵が閻魔王宮に赴いた逸話であった。瑞溪は備忘のために大略を記録している。なお、景徐と寿春の一行も、当日温泉寺に詣し、縁起を拝見、聴聞したのではないかと考える。15・16の両句は、当日の実見聞を反映した句として解される。

以上、第二庚韻の冒頭八聯について検討した。前句との付合を主体にして表面の意味を考える時はそれほど顕著ではないが、一句の成立した背景に眼を転ずる時には、当座性が濃厚であることが判明しよう。そして、この当座性が発揮されている句のそれぞれの素材については、

(1)座景　　(2)人事

の二に整理されるように思われる。

(Ⅲ)　第九聯以下の検討

冒頭八聯においては、前句との付合を勘案しながら、当座性について検討した。第九聯以下の句においては、前句との付合は二の次とし、それぞれの句に用いられている素材に留意し、それぞれの句が成立した背景について考察したい。便宜的ではあるが、冒頭八聯の二素材（座景、人事）の句に分類した上で、検討を加えた。

(1) 座景の句

座景の句は、さらに時、温泉、湯山、宿舎、眺望を素材とした句に細分されるように思う。

《時》

五月初句に興行された聯句であることを勘案する時、当座性が理解される句がある。

23 進瓜為故事　　24 打麥已秋成

瓜といい、麦打ちといい、夏・五月の風物である。瓜を食し、麦打ちを望見したものであろう。23句については、三体詩所収・王建・「華清宮」詩・〃内園分得温湯水、二月中旬已進瓜〃句が想起される。24句については、一韓は「五月ノ時分ナレハ麥秋ト云テムキアキテ秋成ソ」（抄）とする。瑞渓は、鎌倉谷（21句に詠出）に赴く途次の景として「左右皆麥隴水田」（行記、宝徳4・4・16条）と記す。

37 玳瑁笋皮脱　　38 瑠璃木舌軽

皮を脱いだ笋、瑠璃色の木の葉を素材とする。五月の風物である。竹細工・竹皮細工も湯山の有力な土産物であった。

《温泉》

温泉が舞台であることを勘案する時、当座性が理解される句がある。

29 人把浴裙曝

一韓は「湯ニ入ルタンナヤカタヒラナントヲ浴裙ヲサラストホスヲ云ソ」（抄）とする。「タンナ」は、したおび・ふんどしのことである。温泉地ならではの景である。

33 欲洗維摩疾　　34 可消波離酲

温泉の効能を素材とする。維摩の疾をも洗い去るほどであり、優婆離の二日酔いをも消すほどであるとする。

《湯山》

湯山の名勝、風物等を勘案する時、当座性が理解される句がある。

19 癩児牽幾伴

「癩児牽伴」（碧岩録・第十二則「洞山麻三斤」や第七十三則「馬祖四句百非」の頌等参照）は、癩患者が同病の伴をつれて歩く意で、独立できないふがいない人間を罵る語であり、転じて知友を讃える語にも用いられている。が、一韓は「湯山ニ多モノソ」（抄）とも解説している。ただし、「この湯は温（うん）の湯なるがゆゑ、癩病の類かたくいむ」（小鑑）ともある。

21 有谷鎌倉近　　22 其流鼓瀑鳴

21句は「鎌倉谷」、22句は「鼓滝」によった句である。両所は、湯山を代表する名勝である。鎌倉谷は、「前日文叔錦江往于鎌倉谷探勝、尤可羨也」（日録、文正元・閏2・4条）、「東坊日、鎌倉溪若不見之爲遺恨、尤叫妙也」（日録、文正元・閏2・20条）、「（前略）かま倉谷を久く見ざりしほどに、思立、九月四日に一見せしに、あまり彼在所おもしろかりしまゝに、（下略）」（道の記）等の記事からも、温泉からは少しく離れているものの（但道場村に在り、正しくは粉羊谷である）湯治客必見の形勝であったことが知られる。鼓滝については、「予聞山中有鼓瀧、然非西行和歌所詠、今日欲行觀之、（下略）」（行記、宝徳4・4・18条）、「此方鼓瀑有二、西行法師所詠歌者、指多田之鼓瀑也」（日録、文正元・閏2・15条）等と記される。湯山の鼓滝は西行が和歌を詠じたそれではないが、同じく湯治客が一度は訪れる佳景であった。

25 盗臥村無犬　　26 梵稀楼不鯨

当時の湯山は、辺地の貧村に開けた、湯治を目的とした温泉地であった。一句としては、温泉地より外れた村里の状況を素材にして

いると考える。季瓊の記録によっても、湯治客を相手にした盗人が出没している。25句の作者は村人を疑っているようである。26句については、貧村のため梵鐘を有する寺が少なかったのであろう。

27　東方光瑞現　　28　南律戒珠明

27句では須弥山の東方浄瑠璃世界の教主である薬師如来を、28句では戒を持した南都律僧を素材とする。湯山の主である温泉寺の本尊が薬師如来である。「われはこれ温泉山正身の薬師なり」や「この山の地主正身の薬師如来枕がみに立ちてのたまはく」（小鑑）ともある。また、温泉寺の住持や住僧は、「慶阿談餘、戯學前日温泉寺住持老律衲被蒙頭而讀温泉縁記之様子、陽爲之躰、尤爲妙也」（日録、文正元・閏2・9条）や「從此往温泉寺、聞律院僧讀本寺記」（行記、宝徳4・4・22条）のように、「老律衲」や「律院僧」であった。

43　隔晨橋痎市

「隔日ニタツ市ヲ痎市ト云ソ」（抄）とある。湯山の実景ではあるまいか。家並を描写して、「如蛇小屈、巷中小溪西北流、遂入大溪、家〻戸前、聯木爲橋」（行記、宝徳4・4・8条）とする。小規模の即席の市であろう。

69　筧憶和菴主　　70　香尋遠社盟

縦横に懸けめぐらされた竹筧と、焼香のための香煙を素材にした句である。湯治客はひとしく竹筧の滴声と谷川の水音に悩まされたようである（前掲「禪林聯句の当座性―『湯山聯句』第一寒韻冒頭八聯の検討―」論文参照）。「餘に此宿の前にかけひの水又ほそ谷川之水のおつるおと、事外にかしましきあひだ、（下略）」（道の記）を掲げておく。竹筧は湯山の風物であり、この竹筧を見るにつけ、特に景徐は慶元符二霊の知和庵主の偈頌の〃竹筧二三升野水、松窗七五片閑雲〃句を想起したようである。明応二年の湯山行において「竹筧二升水」詩、永正元年の湯山行において「避流通竹筧」詩を製し、それぞれ知和庵主を詠出している。69句は景徐の句か。香煙については、温泉寺薬師を詣した瑞溪が「遂入本堂、（中略）焼香誦經能」（行記、宝徳4・4・11条）とするが、温泉寺における焼香のそれではあるまいか。季瓊は「無垢語日、毎月二日（中略）、又八日於薬師堂温泉寺方丈而地下耆老十員諷齋赴之、住持相伴云〻」（日録、文正元・閏2・8条）と記す。蓮如は「されども、五日八日は天氣事外よかりしかば、今日は幸に薬師の縁日なればとて、薬師堂へまひり、同く坊へゆきて、寺之縁起を所望して聽聞し侍べりぬ」（道の記）とする。毎月八日は、温泉寺の縁日で、特に参詣の人も多かったのではあるまいか。作句当日が五月八日であることをも示唆している。作者（寿春）は、香煙より恵遠の白蓮社の旧盟を想起している。

71　大都緇混素　　72　却掃紫兼赬

僧侶が俗人に混じり、高位高官の公家や武家を却け掃った湯山の湯治客の実態を素材にした句であろう。湯山は庶民的な湯治場であった。特に僧侶や文人の入湯が顕著であり、例えば当地における和漢連句の試みに対して季瓊は「凡此方浴者、緇白往來、不可勝數、偶有此趣又難哉、恐桃李嗔有風流罪乎」（日録、文正元・閏2・19条）と評している。72句については、貴人の来山が無いと言うのではなく、その待遇に貴賤の差が存在しなかったことを意味するのであろう。例えば、2句に詠出された一の湯と二の湯についても、瑞溪は「九日一湯、日二湯、非有優劣、（中略）湯客無貴賤、寓南邊者入一湯、寓北邊者入二湯耳」（行記、宝徳4・4・8条）と記している。

73　尺八唐音碎　　74　五千竺典盈

尺八と竺典が素材である。尺八については、「徳阿在浦上所吹尺

八、其聲尤美也」（日録、文正元・閏2・17条）のような記事もある。田楽の徳阿が尺八を奏している。雑芸者が随伴することも存したようである。竺典については、温泉寺の寺宝として各種の経典が伝えられていることを反映しているのではあるまいか（小鑑や有馬都誌・上・第三編第三章等参照）。前出の尊恵が閻魔王宮より請来した法華経と閻魔王の命を時の帝に奏上して製した金函経とを温泉寺の如法堂下に埋めたとする逸話が、温泉寺の縁起にも記されて著名であった（行記、宝徳4・4・11・22条参照）。

75　龍王斎曾鼓

季瓊は「無垢語曰、毎月二日女躰廟前獻御供、而巫者鼓舞也」（日録、文正元・閏2・8条）を記し、当日の模様を「入夜女躰權現廟前、巫女擊鼓爲舞、毎月今夜之例云々」（日録、文正元・閏2・2条）と記している。75句は、毎月二日に女体権現の廟前で、お供物とともに献ぜられる鼓舞を念頭に置いた作句ではあるまいか。

77　苔暗光明蔵　　78　塵埋解脱坑

77句に関しては、温泉寺に「光明蔵」と扁せられた小堂が存した。「堂北小堂、扁以光明藏、其戸牢鎖、故不知藏何物」（行記、宝徳4・4・11条）とある。如法堂の北側に存した。78句では「解脱深坑」（解脱の様態を地下の深い穴に入って出られないことに喩える）を詠出するが、眼前に深坑が存したのではあるまいか。光明蔵の南側に存し、尊恵の請来した法華経やさらに金函経を地下に埋める如法堂について、瑞溪は「文安乙丑之亂、賊入此山、聞有金函經、發掘此堂、蓋摸發丘之暴、在此時尓」（行記、宝徳4・4・11条）と記す。文安二年（一四四五）、山名持豊は赤松満政と播磨に戦い、満政は有馬で敗死している。この時にあたり、如法堂下が盗掘される。78句の作者は、その盗掘の穴跡に人間の煩悩執着を観じたのではあるまいか。

89　薪使西施賣

89句は、女性の薪売りを素材とする。西施に比することにより、一巻に彩りを添える。前述10句といささか重複する。

91　気蒸塩井湧　　92　土燥墨池平

実際に井戸を掘ると温かな塩水が湧いたのであろう。そのために竹筧により真水を運ぶ要が存したのである。瑞溪が「湯味鹹而苦」（行記、宝徳4・4・8条）とするように、湯山の泉質は含炭酸食塩泉である。景徐は、明応二年の湯山行において「鹽井」詩、永正元年の湯山行において、「味甞鹽井」詩を製している。91句は、塩井を素材にした景徐の句であろうか。92句についても、実景を素材にしたものと解する。時に五月、その上に湯山の湯の色は褐色である。なお、「塩井」からは諸葛孔明、「墨池」からは王羲之をも想起させる（一韓指摘）。

《宿舎》

宿舎の実態・様子を勘案する時、当座性が理解される句がある。

35　共房皆楚越　　36　異席或劉蕚

湯山の宿舎では、他の湯治客と相部屋になることもあり、さらには一行の人々が別々の部屋になることもあった。それを素材とし、すかさず「楚越」と「劉蕚」（漢と秦）を詠出したものであろう。

55　苦哉茶似蜀　　56　薄者酒云宮

苦茶と薄酒を素材とする。「苦哉茶」は、「唐茶」の異名である「苦茶」のことであると解した（品質は茶よりも劣るとされる）。季瓊も「客簷間日之餘、喫苦茶」（日録、文正元・閏2・6条）とする。また、季瓊は湯山の酒を「村醪」「濁醪」「村醪」等と表現している。さらに「俗漢二三輩」の言として、「村醪雖云爲薄其味尤可也、可識古人日有妙理也」（日録、

文正元・閏2・20条）を記している。なお、55句の作者は苦茶を蜀茶に、56句の作者は薄酒を営州の酒（三体詩所収の高適「営州歌」詩参照）に比している。

61　壁影焼麻骨　　62　厨珍啜菜羹

「麻骨ト云ワアサカラソ」（抄）とある。麻幹を焼く影と野菜の汁を素材とする。宿舎の実態であろう。

68　児屋蒟籠盛

「児屋」は「昆陽」のこと。昆陽は西国街道の要地である。行基の創建と伝えられる昆陽寺があり、湯山とは因縁が深い。湯山で不足の品物は、昆陽より補給されたようである。食膳に供せられる昆陽の蒟蒻を素材とする。

《眺望》

湯山における眺望を素材にしているのではないかと考えられる句がある。

17　嵐湿講経案　　18　風揺勧善旗

山気に湿った経机、風に揺らぐ旗を素材にしている。湯山は、高所に位置し、湿気が多く、風も強い。季瓊は「此方諺曰、湯山藏雨云」（日録・文正元・閏2・16条）を載せている。18句については、無門関の第二十九則「非風非幡」を想起させる。

30　前村陽半傾

32　後閣月初生

隔句対の箇所であり、30句と32句は対句である。前村に夕陽が傾く景、自らが宿する宿舎の背後の嶺の上に月が昇った景を眺望した句と解される。

40　青葉倚門撑

「青葉」は初夏の風物でもある。

87　桃榔溪彷彿　　88　翡翠岳崢嶸

あるいは、鎌倉谷における眺望を素材にしていると考える。

90　樹従北秀栄

樹木の繁茂を素材とする。89句の「西施」には、「北地の神秀」を対している。言うまでもなく、「身是菩提樹」に始まる神秀の悟道偈によっている（身是菩提樹、心如明鏡臺、時時勤拂拭、莫使有塵埃）。この悟道偈は、五祖弘忍の後継をめぐる逸話とともに、禅林に流布している。

(2)　人事の句

座衆に関わる人事を素材にした句が存する。道中、座衆、縁故を素材とした句に細分した。道中の句は、座景の句に準じて論ずるべきであったかもしれない。

《道中》

京洛と湯山との道中のことを勘案する時、当座性が理解される句がある。

44　算日路游程

日程・路程を思い計っている。都より湯山へは、二日を要している。

45　驢瘦暮過嶺　　46　鶏鳴早出京

痩せ馬による嶺越えと、早朝の出京を素材にする。五山の長老の湯山行は、輿の場合もあるが、馬による場合もあった。景徐の明応二年の湯山行は、「晩來宜竹昌〔繁〕徐翁來、（中略）全詳首座・法霖藏主同途之、三人皆借痩馬乗之」（蔭涼軒日録、明応2・3・26条）と、痩馬によっている。永正元年の湯山行においては、「借馬入湯山」詩が製せられている。湯山を目前にした難所が、船坂の「七坂八たうげ」（道の記）であった。なお、早朝の出京については、それが通常であろ

う。季瓊は「湯山發軫、曉天大鐘中出寺、於七條至天明閣火炬也」（『日錄』、文正元・2・29条）と記す。

47　名遺関吏問　　48　渡与野人争

関所、渡しにおける場景である。関所については、例えば「寺内新立關、行旅苦之、遂到山崎宿」（『行記』、宝徳4・4・7条）とある。関銭を目的とした新関も設けられ、行人を苦しめていた様子である。渡しについては、道中に桂川、猪名川、武庫川等の大きな川が存し、時に舟を利用することもあった。瑞溪は生瀬の渡しについて、「遂到生瀬河、（中略）常時不航而渡、今深不可揭、渡子一人、艤船相待、時樵夫數十人、已臨岸、先兩航而渡之、然後予不出輿而乗船」（『行記』、宝徳4・4・8条）と記している。順番を争う場面が存したのであろう。

49　鞋破奈霧渋　　50　蓋張要僕更

道中の状景を素材とする。特に50句では、日除けのために絹傘をさしかける従僕を詠出する。一行に随伴していたのであろう。

51　挿秧時小雨　　52　炊黍暁長庚

51句、一韓は「挿秧（秧）ト云ハ五月ノ時分ヲ云ソ」とし、その時には「チリ〳〵ト小雨カ必フルソ」（抄）と解説している。捜秧（稲の苗を植える）の景を素材とする。瑞溪も「路在水田麥隴間、往來人少」（『行記』、宝徳4・4・8条）と、道中に田園風景の存したことを記している。52句、一韓は「旅人ノトマリテ立ツ舎ニハ（下略）」（抄）として、旅宿の景として解している。京より湯山に赴くには、途中で一泊するのが通常である。翌朝の早出を素材にしたものであろう。

67　難波蘆矢直

一韓は「摂州ノナニハノアシト云テ名所ソ、」（抄）とする。道中における蘆・浜荻の実見聞を素材としたのであろう。

《座衆》

座衆を素材にしたと考えられる句がある。特に、相手僧を称揚し、自己を謙遜することは、それが自然になされれば、一座の和気を醸し出すのに効果的であった。

20　旅客話多情

31　僧支吟杖立

自己をそのままに詠出している。

41　心外予何仏　　42　胸中欲是兵

41句に関しては、「心外無別法」や「即心即仏」の禅語がある。42句については、一韓は黄庭堅の句として「忽欲生五兵」（抄）を引く。禅僧の立場、生き方を背景にした句である。

53　病脚陶耶我　　54　飢腸甫也征

53句の特徴は、「我」を陶淵明に比して詠出することである。「我」は景徐である。景徐には、「次韻西阜正甫年少」詩・〃我今脚疾未行見、澗道餘寒凍鎖花〃句や「臥陶齋」詩・〃吾生何以比陶家、白髮年來脚疾加〃句がある。脚疾に苦しみ、時に陶淵明に比して表現した。陶淵明の脚疾については、「素有脚疾、向乗籃輿」（晋書、陶潛伝）とある。また、湯山の湯は脚疾に効能が存した。「脚疾者自南都乗輿入洛、人皆見之」（『日錄』、文正元・閏2・7条）のような記事もある。54句は、寿春が寺、塔頭、寮舎を転々とした自己の身上を杜甫に比したものであろう。

57　徒袖楊枝手　　58　莫尤木槌晴

楊枝は、歯木ともいい、禅僧の具した十八物の一である。木槌(子)は、もくげんじで、種子を数珠玉に用いる。禅僧の一行の所作であることを暗示させる素材である。57句は、宿舎における粗味粗食に

対し、楊枝の手を空しく袖にしたとする。58句では、数珠玉そのままの瞳をした随伴僧（景禅か）を咎め立てしないようにとしたのではあるまいか。なお、永正元年の湯山行において、景徐は「覺楊枝固齒牙」詩を製している。

59　説詩逢項善　　60　好学見蘇甥

項斯と蘇軾の甥（弟・轍の子である遲、迨、遜）を詠出する。座衆を称揚するために著名先人を詠出するのは、一の常套手段である。59句では相手を項斯に、60句ではおそらくは随伴の僧（等潢と景禅）を蘇軾の甥に比している。「逢人説項斯」故事は、楊敬が人に逢うごとに項斯の人柄を称えた故事である。

63　餘生唯睡課　　64　毎旦甚公評

63句、作者が自己の余生について、「睡テヒル子ヲ日課ニスルソ」（抄）とする。鹿苑院を退院した直後である点に留意すると、景徐の述懐と考えられる。なお、寿春の（軒）号は「睡軒」であった。さらに、季瓊が益之（号、睡隠）について「益翁依浴困而只懶睡耳、可知睡隠稱之」（日録・文正元・閏2・5条）と揶揄するが、温泉の入浴・湯疲れに睡眠は付き物であった。64句は、後漢・許劭の「月旦評」（毎月朔日に品題を定めて人物を品評した）故事を詠出する。が、おそらくは禅僧・住持が毎月旦日に行う上堂（法語）を念頭に置いた作句であろう。一句としては、住持生活を揶揄したものであろう。

65　意気名瞞虎　　66　文章姓禰鸚

先人を詠出して、相手を称揚する。65句では相手僧の意気を曹操（字、阿瞞）のそれに、66句では相手僧の文章を禰衡のそれに比する。「禰鸚」は、禰衡が「鸚鵡賦」を製したことによる。

76　鵠叟隠居枰

白髪老人の隠居所における碁盤を詠出する。一行・座衆の湯治の余暇の無聊を慰めるための囲碁を素材にしたものであろう。

79　身衰添薬裹　　80　眼翳減灯檠

自己の衰病と自己の眼翳を素材にしたのではあるまいか。79句の作者は、中風が原因で鹿苑院を退院し、しかも脚疾の持病を有した景徐であろう。80句、寿春が実際に眼疾を患っていたか否かは定かでない。眼疾者が湯山を訪れたことは、「貫柳患眼未療、閑座與人不交、空消日、尤爲可憐乎」（日録・文正元・閏2・20条）等によっても知られる。

81　咲々白拈賊　　82　還如摸象盲

83　休々黄達磨　　84　自称老狐精

隔句対の箇所である。81句と83句が対句でともに相手を称揚し、82句と84句が対句でともに自己を謙遜しているように解される。対句を作る際の妙味の有無、負担の平等、さらには句の内容から言っても、82句と83句が同一作者であると考える。81句、「白拈賊」（白拈じて、迅機・大機用の盗賊、すりの意。転）について、一韓は臨済や徳山のことを指すと説く（臨済と白拈賊については、碧岩録・第七十三則「馬祖四句百非」頌に〝馬駒踏殺天下人〟、臨済未登白拈賊〟とあるのによるか）。臨済・徳山をも嘲笑するほどであるとして、相手僧の迅機・大機用を称揚する。82句は、自己の狭見解を「摸象」の盲人に比して謙遜する（「摸象」逸話は、大般涅槃経に載せられる）。83句については、一韓は「山谷カ詩モ江西ノ詩祖ト云テ山谷ヲ達磨ニタトヘテ其門下生ヲハ宗派ノ裏ニ入ル、ソ」（抄）と説く。相手僧を江西詩派の祖として達磨にも喩えられる黄庭堅に比して称揚したものである。84句について、一韓は「達磨ヲハ老狐ノバケモノト云ソ、（下略）」（抄）とする（一韓は、「東山詩空の頌詩を典拠」。未確認として掲げている）。83句で黄達磨・黄庭堅に比された作者が、「私こそは文字通りの『老狐精』です」とし

て、謙遜する。83句、「休々」の語より、鹿苑院を退院して公務より解放された景徐を称揚した句ではないかと考える。作者は、81句景徐、82句と83句寿春、84句景徐ではあるまいか。

85　偏局毒攻毒　　86　多言猩罵猩

自己の偏局（偏狭の見解）を謙遜した句と、自己の多言を謙遜した句である。

97　下々閻浮報　　98　重々地獄衡

自己の悪業による悪報と、自己の罪業の重さを素材にする。謙遜の句である。

99　業風吹老々　　100　聚首雪莖々

業風（業因が転々として、業報の移ることを風に喩える）と白髪聚首を素材にする。一巻を結ぶにあたり、お互いの身の上を詠出したものと解する。99句について一韓は「長老ヤ住持ノアナタコナタノ住院シアルクヲハ業風ニ吹ル、（下）云テアルソ、（下略）」（抄）とする。99句・100句には、謙遜の句でありながら、祝福の意が籠められている。

《縁故》

座衆が無視することのできない縁故、特に庇護者を念頭に置いた句がある。

39　赤松分国接

国境に立つ赤松を詠じた叙景の句でもあるが、やはり赤松氏を詠出しなければならなかったための句と解される。湯山の存する摂津国有馬郡は、播磨守護家の赤松氏の一族である有馬氏が領有した。赤松氏と有馬氏とは、赤松一族でありながら、播磨国と摂津国に分かれて存立したことになる。有馬氏の有馬郡における地位は、「分郡守護制」とも呼ばれる制度が考えられるほどに（兵庫県史・第三巻参照）、強固なものであった。しかも、景徐と有馬氏とは、親密な関係が存した（後述）。39句は、有馬氏に対する挨拶の句である。

93　鵝変換羊帖　　94　雒知司馬英

韓宗儒が蘇軾の法帖を得るごとに姚麟の許で羊肉数片に換えたという「換羊書」の故事と、司馬光も一員であった「耆英会」の故事とを詠出している。93句、一韓は換鵝帖（晋の王羲之が鵝と換えるために写した帖）が換羊書に変じたとして解説している（換羊書の典拠である「換鵝録」の記事に従ったか）筆者は、「鵝」は鵝眼銭の意で、「換羊帖」は暗に魚肉を指すと考える。94句については、「司馬英」は、例えば有馬郡の守護である有馬氏を暗に指すと考える。少しく大胆に過ぎるかもしれないが、二句の背景には、領主である有馬氏が「肉汁」等を贈って景徐の一行を慰問するといった出来事があったのではないかと推量する。季瓊の記事によると、「浦上於喝食贈肉汁也」（日録・文正元・閏2・10条）のように、時に武家方より肉汁が贈られている。景徐と有馬氏については、例えば次のような記事が見られる。

有馬出羽守今剃髪入道號耕雲軒、（中略）因約以其季子喝食侍予側者、予領□、（鹿苑日録・明応9・2・3条）

景徐の記録である。景徐は、温泉で療養するために鹿苑院の退院を決意・工作していた時期にも、都において有馬出羽守則秀（号、耕雲軒）と会している。しかも、則秀の季子を附弟とすることを約束している。則秀としては、自領の湯山で湯治する景徐を慰問する理由は十二分に存した。景徐（一行）としては、その好意に酬いるべきである。94句、「司馬光にも比される有馬則秀殿の英傑ぶりは、都の諸人のよく知るところです」と称揚したのではあるまいか。なお、景徐の永正元年の湯山行では、「謁府君拜賜」詩が製せられて

治・保養であったことを考慮すれば、首肯できる現象である。

――岡山大学助教授――

いる。

95　政魏凉五月　　96　暦尚夏新正

95句は政事を称揚し、96句は太平を賛美する意図で作られたと解する。95句の表現は司馬光の元祐の治政に対する「詩林広記」の評を借用したものであるが（一韓指摘）、一句としては現今の施政者の政事を称揚したものである。時はあたかも五月であった。96句は、帝王が新たに国を建てると新暦を発布したというが、世は太平であるからそのまま夏の正月（寅の月）に従い、改暦の必要がないことを述べる。おそらくは、将軍に対する挨拶の句である。景徐の湯山行がいわば将軍公認であったことはすでに触れた（前掲「景徐周麟と『湯山聯句』―成立の背景について―」論文参照）。帰洛の日には、礼謝のために出仕し、報告かたがた「湯山聯句」を呈上したのではないかと想像した。将軍を賛美する句を用意する必要があった。この点からは、95句についても、前句からは有馬則秀の政事の称揚とも解されるが、将軍義高の政事に対する称揚と考える方が妥当かもしれない。

「湯山聯句」第二庚韻の各句について検討した。当座性は濃厚で、全句にわたり発揮されていると考える。このような聯句こそ稀少であることも事実であるが、禅林聯句においていかに当座性が尊重されていたかが判明しよう。なお、各句が用いた素材について整理すると、「座景」と「人事」に大別された。例えば「蔭涼軒日録」に記録される聯句と比較する時（中世文芸・32号「『蔭涼軒日録』における漢聯句の当座的性格」論文参照）、当時の禅林や一般社会において催された「行事」や発生した「事件」について触れられた句が認め難いのが特徴である。この点については、明応九年の湯山行の第一の目的が禅林社会をも含めて俗座を離れての療